

論文内容の要旨

論文提出者氏名 野村 麻由子

論文題目

Isolation and unnatural death of elderly people in the aging Japanese society
(高齢化の日本社会における高齢者の孤立と不自然な死)

著者名 : Mayuko Nomura, Stuart McLean, Daisuke Miyamori,

Yasuhiro Kakiuchi, Hiroshi Ikegaya

＜目的＞近年、先進国では 80 歳以上での死亡率は近年低下し続けている。日本は今や予想だに
しなかった高齢化社会となった。社会の高齢化に伴い家庭における高齢者のネグレクトや虐待
と言った様々な問題が様々な国々で報告され、日本では近年、高齢者の家での孤独死が増加し
てきている。世帯の構成人員も変化してきた。以前は 3 世代以上が同居する大家族世帯が一般
的であったがその後核家族の割合が増加し、更に近年では独居世帯、夫婦だけ、老夫婦と独身
の子といった世帯が増加してきた。高齢者が暮らす家庭環境はこの 2～30 年間で激変したが、
社会的弱者である高齢者をケアする家族の能力は必ずしも向上しているとはいえない。高齢者
虐待や死後の年金不正受給といった問題を引き起こし、これらに対して行政での対策が講じら
れるようになった。本研究では、高齢者の自宅で起こった不自然な死亡の内容を把握すること
を目的に、20 年前と現代における高齢者の法医解剖症例を調査した。

＜方法＞

京都府下の 65 歳以上の高齢者の 297 症例の法医解剖記録と死亡診断書を調査した。これらは
1989～1993 年（約 20 年前）では 45 例、2009～2013 年（現代）では 252 例を含む。家族と
同居していたか独居であった人で発見された場所が自宅であったものに限定した。家族構成の
影響を調査するために独居（グループ A）と家族と同居（グループ B）に分けた。第一発見者
（家族か他人か）、発見までの経過時間（救急搬送されたか、死後 2 日以内か、事後 3 日以上か
）、推定死因（内因死、外因死、自殺、他殺、不詳の外因死、原因不明の死）を調査した。約
20 年前と現代で、またグループ A と B との間で比較した。

＜結果＞

現代では 20 年前と比べ家族が第一発見者であった事例が多かった。20 年前グループ A で
は別居する親族による発見は皆無であったが近年ではその割合は約 20%であった。20 年前では
グループ A、B で経過時間が死後 3 日以上であった割合はそれぞれ 14.3%と 7.1%であったが、
近年ではそれぞれ 48.4%、19.2%と有意差をみとめた（ $p=0.0002$ ）。20 年前はグループ A、B
で不詳の外因死の割合はそれぞれ 28.6%と 21.4%であり、現代ではこれらは 50%近い割合であ

った。現代では死因不詳の割合が 20 年前と比べて有意に高かった（ $p=0.015$ 、グループ B に限
ると $p=0.037$ ）。現代では殺人の事例数は 20 年前と比べて有意に少なく（ $p=0.0018$ ）グループ
B に限っても有意に現代で低かった（ $p=0.0022$ ）。

＜考察＞

家族による発見の増加と他人による発見の減少は近隣住民とのコミュニケーションの減少を示
唆している。独居グループにおける別居の親族による発見の増加は、核家族の増加を示唆して
いる。同居グループにおける死後 3 日以上経過後に発見される事例の増加は家族間でのコミュ
ニケーションの減少と高齢家族への注意の低下を示唆している。現代では救急搬送事例にグル
ープ間で有意差がなかったが、これは家族の危機的状況発生時に適切に対応するという家庭の
能力の低さを示唆している。以上より、現代では地域社会や家族が高齢者に適切に対応するの
に十分でないことを示している。現代では死因不詳事例と不詳の外因死の事例が有意に高かつ
た。死後発見までの時間の延長は死体を腐敗させ死因の推定を妨害する。このような状況でも
っとも危惧するのは家庭内の殺人の看過である。

自宅で独り亡くなった高齢者の死因と発見状況を知することは、日本だけでなく家族や地域社
会の結びつきの弱体化を伴う高齢化社会に直面している国々において、高齢者の安全な生活と
安らかに最期を迎えるためのサポートシステムを改良するのに有用であると思われる。